

2020 The New Earth

A travel report

——ネイサンの物語——

13. 体験する

「俺たちが一緒になってどれくらいになるかと、君は尋ねたが、その答えはこうだ。俺たちはみんなずっと一緒にいる。無限に多様な生命の形をとりながら。我々にはそれぞれ 1,200 万のソウル・パートナーが地球にいる。その数は、**一つの魂が**、数え切れないほどの転生で経験したいものを、我々が協力し合って経験するために必要な数なんだ。大きなプロジェクトグループみたいなもんだよ。そしてどの人も重要だ。分離を思わせるものは、いずれも幻想だよ。全体から、特に神と我々自身から外れていった結果なんだ。それはこの地球上でのプログラムなんだ。いかにリアルに見えようと関係ない。何も本当のものじゃない。俺がマイケルとバーバラから特別なことを学んだので、俺がいかに早く彼らに感謝するようになったか、君には信じられないだろうね。誰も悪いことや、よこしまなことを、本当に行えるものじゃない。悪いこと、よこしまなことというのは、そのように**解釈されている**に過ぎない。そしてその解釈のみが、観察者——他の誰かではなく——にとって唯一リアルなものなんだ。俺は数日間、彼らに腹を立ててたし、不当に扱われていると思っていた。でも後になって彼らをハグすることが出来たよ。それが良い考えだからそうしたんじゃない。だって彼らと一緒に何かを楽しむなんて不可能なことだし、特に彼らは、まだ自分たちの憤りにかられたままだったからね。それでも彼らの行動がなければ、俺の経験はありえなかった。いわゆる、ソウル・パートナーがいなけりゃ、我々は何も経験できないんだ。彼らはしばらく後になって、落ち着きを取り戻したよ。共に座って、また親しく交

流できた。その間、俺の周りには俺を受け入れてくれた人たちがいた。彼らは自分の中心を保っていられる人たちだったので、楽しく過ごせたよ。それから、俺も前よりうまく自分を保てるようになった」

「へー、あの人たち本当に君を追い出したの？ 僕にはどうだった？」

「君には何もしなかったよ。どうせ君は出て行ったから。君は数カ月間トーマスとケイティと一緒にヨットの旅に出たんだ。そして聞いたところによると、君は彼らのネガティブな波動を、実にうまくかわしたそうさ。それが俺のまったくできていないところだったのさ。それって昨日君がもう一人の君に質問したこと——君を放っておいてくれない人をどう扱うか——の答えになっているだろう？」

「うん、そう思うよ。まだうまくイメージできないけど。今はそれがとても理屈にかなっていると思う」

「すぐに自分で確かめられる機会が来るわよ。そうしたら、ちゃんと実体験を積んだことになる」クリスティーナが笑いながら言う。「もう何も恐れる必要がなくなるわ」

「ということは、僕はトーマスとケイティとこれから数カ月間、世界をヨットで廻るんだね??」その考えは僕を笑顔にする。「どこを廻るんだろう？」

「教えて上げられるけど、あなたが自分で見つける楽しみを……」

「分かってる、分かってる。台無しにしたいくないんだね……」僕たちみんなので笑ったら、気が楽になった。

僕の中に、何か説明のしようがないものが生まれた。それは僕に Ella Kensington の『[Mary](#)』という本を思い出させた。2015年の初めに読んだけど、興味深い本だった。それは地球の人生に興味をもつ、ある存在の話だ。その存在は、語られているすべての『問題』を体験することを欲した。あなたがまだ読んでいないのなら、僕は読むことをお勧めします。この存在は『エラ』と呼ばれるソウルの助けと、他のソウルたちからの助けを得て、メアリーのために、彼女が経験する様々な状況を準備する。エラはメアリーに、経験とは常にこのように創造されるのだと説明する。経験とはこのようにコーディネートされ、ソウルのレベルで、「プログラム」される。そしてコンピュータープログラムのようにプレ

イバックされ、『本物』のように体験される。その体験に関わっているどの個人のエゴも、自分のフィルターを通して自分の視点をもってそれを体験している。だから、個人的な体験が可能なのだ。そのことを理解することが重要である。メアリーは、彼女の周りの誰もが、彼女に対して物事を無意識に行っている事実を、よく意識している。しかし、彼女が、その場における自分の役割が、他のエゴの経験のためにどれほど重要なものだったかを悟るには、しばらく時間がかかった。こうして、いかに**すべてが繋がっているのか**、読み手に明かされる。

こんなことを考えながら、近隣を散歩して過ごした。他者と対話することで新しい考えを持つようになった。僕は自分の思考パターンが変わっていく様子を実際に見ているし、様々なものに対する知覚も変わった。突然、一筋の光が僕を貫いた。今ならわかる。**どうして僕がここにいるのか**。僕が本当に属している時間ではないが、なぜか、まだここにいるのだ。今、僕がどうしてメアリーの話を出したのか分かった。トゥルーマン・ショーの主演であるような感覚は、**僕に**何かを告げたり見せたりするために、この状況にあたかも実在しているかのようだ。そして僕は、今初めて分かった。僕は、僕の思考と行動を通して、他の人たちが**彼らの**経験をするのを助けるためにここにいるのだ。起きていることは、すべて本当のように見えているだけなのだ。僕たちみんなが互いに関わり合って一つ一つの想像できる経験を創り出している。誰もソウルレベルでの同意無しに考えたり、話したり、何かを行うことはできない。『正しい』考えも『間違っている』考えも、いずれも相対的なものなのだ。他のものとの関連においてのみ、正しかったり、間違っていたりするのだから。

僕の思考は、今、ここにおいて、消失した。圧倒的な明晰さ。その波で洗われているようだ。僕の感覚が、僕にいたずらをし出した。素晴らしい薫りが僕を包んでいる。僕の周りの木々、灌木（かんぼく）、花々の匂いだ。僕は気が付いた。それはいつだってそこにあったのだ。いなかったのは僕の方だ。少なくとも、僕の思考がよそにいたのだ。僕の目は花畑を歩いている。こんなに色鮮やかなことがあつたらうか。こんなに鮮明な彩りを、僕は今まで見たことがない！ 僕の

周りで、静寂というコンサートが奏でられていた。指揮者も音符もいないコンサート。鳥が歌っているのが聞こえる。これ以上美しいコーラスはあるだろうか。セミの鳴き声さえ、鳥の歌う旋律にリズムを添えている。ミツバチやマルハナバチのハミングは、バグパイプの通奏低音を思わせる。それもまた、鳥たちの歌に完全に調和している。以前にも全部そこにあっただのに、僕が気付かなかっただけ。どうして突然大きな音になったのだろうか。何も変わっていない。今、僕はそれを聞いている。僕の体が動いている。僕の息が、暖かな真昼の太陽のように、体を廻っている。それは強烈に輝いていて、この瞬間、僕はそれと一体になり、すべての細胞でそれを感じている。イチジクが目の前の一本の木にぶら下がっているのが見える。僕がすべきことは、ただ手を伸ばして摘み取るだけ。とても柔らかくてみずみずしい。かじると僕の味蕾が炸裂した！僕はそれを鼻でも味わうことができる。僕の舌と口がくすぐられて、体の中がふるえる。人生をただ純粋に享受したいという思いが溢れ出てくる。何もかもが、こんなにも信じられないくらい強烈なのだ。

この瞬間、僕のマインドは静止した。ただ、働くのが止まったのだ。この瞬間、マインドは、あらゆることが可能なのだと理解している。マインドがマインド自体を理解している。マインドは、それがどのように働いているのか、僕と一緒に観察できるのだ。知覚されるあらゆることを、どのようにマインドが解釈しているのかを。何か genuinely 確かなものだと感じる時、マインドが、さの確かさを揺るがすものを悪と決めつけたり、無視したりすることを。この理由により、マインドは常に正しいのだ。たとえそれが僕たちの死を意味しようとも。

Vera F. Birkenbihl が講演で、脳について解説していた。マインドのツールである脳が、どのように働いているかを。外からもたらされた情報は、まず左脳に記録される。それから左脳は右脳に尋ねる。「我々はこれについて何か知っているだろうか？」

右脳は、潜在意識を掘り返す。そこには僕たちの経験がすべて貯蔵されているのだ。そしてその情報を解釈する方法を探し、思考に渡す。何も見つからなければ

ばスクリーンは空白のまま、僕らは、理解していないという感覚を得る。マインドの判断が、常に正しいとプログラムされている場合、僕たちは観察する（言われていること、体験されていることの**すべてに**耳を傾ける）代わりに、反応する。その場合、僕たちは何も学ばずに習慣的な振る舞いを繰り返すだけだ。

周りのものを楽しみながら散歩している間、僕は自分のマインドがひとりでに再プログラミングしているのを見ることができた。僕がどうやってそれを助け、あるいは影響を与えるのかわからなかった。どっちみち、それは重要なことではないように思われた。また、僕が自分の興味に応じた視点から見ていることもわかった。僕のマインドは、僕の興味に従っており、特定の視点から経験する必要があることを、僕に見せ始めた。突然、僕はアインシュタインの 95 % の『unused potential』、つまり僕たちの中に眠る 95 % 以上の潜在的可能性を理解できた。僕はもっと説明できるけど、それではあなたが自分で見つける楽しみを台無しにしてしまいます。

僕の頭を明晰な思考で射貫くことで、僕のマインドは再プログラミングを続けていた。無意識のこと、意識していること。ほとんど思い出せないもの、説明できないもの。けれども自分を愚か者だと思わないし、知らないことを恥じる必要もない。自分の中の何かが、ブラックホールの真ん前に立って楽しんでいるように感じる。ブラックホールから何でも出てくる。次に出てくるのは何なのか、辛抱強く待ち構えているネコのように、興味津々、ハラハラしながら待っている。僕は、理解可能な状態という感覚を得た。僕のマインドが、すべてを把握する必要がないことを理解したためだ。いつでもそうしたいときに何かを理解できる。マインドが学んでいるがままに、ただ状況を観察すればいいのだ。そうすればマインドは最終的に**必ず**それを理解する。あなたは理解できましたか？

「もう一回」と僕のマインドは言う。まるである書物の最後の段落を再読しているようだ。「いいよ」と答えが返ってくる。「了解」。その間、僕は自分の内側と、周りにある楽園を楽しみ、マインドに微笑みかける。マインドは独り言を言

いながら、これもまた常にそこにあったのだと認識している。それは、今始まったばかりではなく、僕が今、知覚した変化なのだ。それは単純なロジックで僕に告げる。僕の世界も、僕自身も、二度と同じものにはならないことを。歩みを進めるごとに、息をするごとに、僕は周りのものとますます**一つ**になっていく。僕は自分の周りの世界になる。僕が周りの世界ではないことを、僕は**知っている**。僕は、自分の中に生じているものすべてを見ながら、体験しながら、知覚する主体だ。僕は自分の周りのあらゆるものである。僕はあらゆるものと繋がっているだけでなく、僕が体験しているあらゆるものが、**僕なのだ**。僕の意識は別のレベルにある。そこでは、あらゆるもの、そして僕をニュートラルな観点から観察している。それこそが、僕が唯一**リアル**であると気付いたものだ。角を曲がると、誰かにぶつかる場所だった。それは僕、ネイサンだった。

僕は大きく目を見開いて彼を凝視する。それから僕は理解した。僕がこれまでいた『宇宙』は、こんなにわかりやすいものじゃなかった。シンクロニシティーだ！

「やあ、その君」彼が僕に挨拶して尋ねる。「夢でも見てるの？ そんなにあからさまに見つめられることは、そうあるもんじゃない。僕のことモジョーと読んでくれ。喜んでお付き合いするよ」

僕は真っ直ぐ彼の目を見る。ネイサンの顔が変化するのが見える。そして突然、まったく別の人物が僕の前に立っている。僕はびっくりしたが、不思議だとも馬鹿げているとも思わない。僕はただ観察しているのだから、そこに不可解が入り込む余地はない。何か説明のつかないことが起きた。僕のマインドにとっては、初めて新しいプログラミングを試す絶好の機会。僕が不可解なタイムトラベルを経験したのは、ほんの昨日のことだけど、僕は混乱し、よるべを失い、不安だった。今の僕は、興味をそそるものをただ体験していて、ショーを楽しんでいる。

「こんにちは、モジョー。僕はネイサン。僕、本当に夢見ているのだと思う。現実とは違う夢の世界。それに僕たちが会おう前の現実が夢になる。だから、君のことを凝視してしまったんだ」自分の目を見ることはできないけれど、どんな目

つきをしているかは感じられる。僕は自分の内側で彼を知覚している。自分の内側が、どのように彼を知覚しているのか感じられる。僕の目の周りの筋肉が感じられる。僕のこめかみがぴりぴりする。

「僕はびっくりして君の前に佇んでしまったんだよ。最初の数秒間は、君は僕と同じ容貌をしていた。それから君の容貌が変わり、君の名前も、君の声も変わったんだ」

「僕もびっくりしたよ。君は今繋がったばかりみたいだね。そうだろう？ 君のコンソール（制御盤、ゲーム機の本体）はもう使ったの？」モジョーが興味深そうに尋ねる。